



after

ない」とおり、コツコツと毎週の練習に取り組んでいます。空手の「型」は正確なフォームや技術が求められる競技。一つひとつの姿勢や動作を覚えて、実際に披露できた時は達成感があります。昨年まではコロナで大会がありませんでしたが、先月の大会であ

は優勝することができました。今は紫色の帯ですが、来月の昇級審査で昇級できたら茶色の帯に昇格できるので、審査では練習の成果を発揮できるようにしたいです。高校からは「組手」もできるようになるので、型で学んだことを生かしさらに上達できるように、これから練習に励んでいきます。



花岡中学校  
はぎはら ゆうま  
萩原 悠真 さん(3年生)



中学1年生の時から生徒会役員をしており、現在は生徒会長。生徒総会の開催や行事の準備など、大変だがやりがいがあると語る。趣味はゲームの「マイクラフト」。

小学4年生の時に、空手をしていて友人から誘われたのがきっかけで「錬心館」で空手を習い始めました。周りの人と比べると始めた年齢は少し遅いかもありませんが、先生の教えである「汗の量は嘘をつか



school

昔、鹿屋で起きた出来事にクローズアップ!



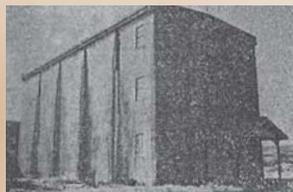
## タイムトラベル ~温故写新~

29話

### 鹿屋を支えた養蚕業



明治政府が富国強兵、殖産興業に力を入れたことにより、全国的に養蚕熱が高まったことで、鹿児島県でも養蚕が行われるようになりました。大正から戦前にかけて、繊維産業は日本の重要産業であり、輸出の約7割を製糸が占めるほどでした。昭和2年、鹿屋町の戸数3,870戸のうち、約千戸が養蚕農家であり、およそ200haが蚕の餌である桑畑でした。当時、紡績で日本一の売上を誇る「昭和産業株式会社」の誘致に成功。多くの農地が買収され、1,500haという広大な畑が開かれ、桑苗が一直線に整然と植えられていきました。最盛期には



▲昭和5年5月に建造された「肝属郡乾繭農業倉庫」。倉庫の容量は900tにも昇り、1日に1万5,000kgの繭を乾燥することができた

3,000人の従業員が働き、付近の民家に電灯がない時代に同社には煌々と明かりがつき、別世界かのような印象を与えていたと言われています。反響も大きく県内外から視察が相次ぎ、米国からの視察があるほどでした。その後、当時としては画期的な養蚕から糸の製造までを一貫体制で行う、製糸工場の建設計画が立ち上がりました。しかし製糸工場の建設計画が進む中、化学の発達により化学繊維が製造され、世界的に商品として市場に広がっていきました。すると養蚕業は次第に下火となっていく、この計画は夢破れ、昭和26年に撤退することになりました。時代の変化とともに産業構造も変化しましたが、現在でも本市には多くの誘致企業が立地しており、本市の雇用を支えています。